

新渡戸稲造著「武士道」岩波文庫 1938年10月15日刊を読む

武士道とは

1. 武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。
2. それは古代の徳が乾からびた標本となって、我が国の歴史の腊葉集中に保存せられているのではない。
3. それは今なお我々の間における力と美との活ける対象である。
4. それはなんら手に触れうべき形態を取らないけれども、それにかかわらず道徳的雰囲気香らせ、我々をして今なおその力強き支配のもとにあるを自覚せしめる。
5. それを生みかつ育てた社会状態は消え失せて既に久しい。
6. しかし昔あって今はあらざる遠き星がなお我々の上にその光を投げているように、封建制度の子たる武士道の光はその母たる制度の死にし後にも生き残って、今なお我々の道徳の道を照らしている。
7. ヨーロッパにおいてこれと姉妹たる騎士道が死して顧みられざりし時、ひとりバークはその棺の上にかの周知の感動すべき讃辞を發した。
8. いま彼れバークの国語〔英語〕をもってこの問題についての考察を述べることは、私の愉快とするところである。

P25

[コメント]

多様性を重んじながら日本人として国際社会でどのように生き抜いていくかを考えるときに、自ら日本人とは何かをつきつめて考えることが必ず求められる。その際、新渡戸先生のこの「武士道」はとても参考になる。一文字、一文字、真剣に読むべきと思う。イギリス人の精神を知る上で、エドモンド・バークの著作も欠かせない。

- 2009年1月17日林明夫記 -